日本動物志

戸川幸夫

日本動物志

戸川幸夫

文藝春秋新社

日本動物志

昭和三十一年十月十日 印刷
昭和三十一年十月二十日 發行

定價 二〇〇圓

著作者 戸川幸夫
發行者 車谷弘
印刷者 柳川太郎

發行所 文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店又は發行所にてお取換致します

© 1956 Yukio Togawa.

日本動物志

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

飴色角と三本指……五
爪王……四三
吾妻の白猿神……八五
左膳鴉……一二七
武尊の兄妹熊……一六三
佛法僧……二〇七
あとがき……二三〇

飴色角と三本指

羚羊

かもしかは牛科に屬する日本特有の動物で「いわしし」「くらししし」「あおししし」「あお」「にく」「おどりじし」などと呼ばれている。肩高六六・五CM、體長一・三M、頭の角一五CM、角は黑色で枝がなく後方に向つて反りをうつている。稀に飴色の角も見られる。先端は鋭く尖り、始終木の幹などで磨いている。角の基部には隆起した横輪が見られる。蹄は偶蹄で耳と尾は同長、毛は灰黑色、褐色で腹面に白毛が多い。綿毛があるので雪の吹き晒しでも平氣である。

本州、四國、九州の山岳地帶に棲息しているが濫獲されて殆ど絶滅に瀕したので天然記念保護獸に指定されたが、肉が旨く、皮角に値うちがあるので密獵が絶えない。溫しい動物だから、猿や鹿のように人間に慣らして觀光の面から保護を加えるとよいと考えられる。

一

それは怒濤の押し寄せるにも似た山脈の重なりであつた。

番城山の山巓を境として南は宮城縣側になり、木魚のような奇ッ怪な形の五郎山を正面に、右手に仙王岳、龍ケ岳、左手に西ノ森山、蛤山、高千森山、フスベ山が連なり、それらの峯を越して不忘山、屏風岳が一際高く銀色に、雪と氷に閉ざされた佇いを見せていた。眼の下は峠田岳の山麓を廻つて白石川がうねり、それに沿つて山形縣二井宿村から宮城縣白石に通ずる街道が走つている。北は山形縣だつた。左に峯つづきの蓬澤山が聳え、順に不平山、行燈立山、高森山となつて右の峯つづきの二ツ森山、さらにその向うの舟引山の肩へと結びついていた。

朝日連峯に始まり飯豐、吾妻、藏王を貫いて走る〝奥羽の大屋根〟が急傾斜をなして終ろうとする邊り、宮城縣刈田郡七ケ宿の、この一帶の山岳地帶は俗に一澤七里と呼ばれる大深澤、小深澤、

大野澤、茂ケ澤、柳澤、たてや澤、ブナ澤と幾つもの雄大な澤々を抱き、さらにその澤々は幾十、幾百の名もなき、だが深く險しくて積雪期以外には人の入り込むことを許さない割谷や岩襞に滿ちていた。

そしてこれらの峯々に君臨するかのように遙か彼方、東北方に大藏王の地藏、熊野、刈田の三峯が悠然と峙ち、そこから杉ケ峯、二ツ森、番城の裏山にかけて果しない檜の大原生林が見事な景觀をなして續いていた。

時機がもう少し早かつたなら有名な藏王のモンスターが、この原生林にも見られたに違いなかつたが、凍りついていた冬も殆ど終ろうとしていたので、原生林は白い雪を下地とした飛白模樣を作りあげているに過ぎなかつた。

山巔は冷たい、というよりは痛い、刺すような西風が連日吹き荒んでいたが、三月の陽の光には鈍い、柔らか味が加つて、一、二月の北風のころの酷しさはなくなつていた。雪がそれを一番早く證據だてていた。眞冬の、キシキシと軋むような硬雪はもう見られなかつた。溶けては凍り、凍つては溶けた粗目雪に變つていた。澤に下るとまだ丈餘の雪が積つてはいたが、その厚い雪の下でさえ、大地の息吹きに溶けた氷水がトンネルを刳り潺湲と音を立て始めていた。

春の氣配は里から訪れ、澤々の口では蕗の薹やウルイやイワスゲやウドが顏を覗かせだす。羚羊の群は特にこれが好物だつた。寒い冬の間は澤奥の雪に埋まり、風に薙ぎ倒されたブナ、サルナメ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シ、アオカ、ナラ、イタヤ、ヤマツツジなどの固い苞をむしり、青タモやタラ、コシワバラの臭い木の皮を齧つて飢をしのいでいた羚羊たちも下界から春が訪れてくると柔らかくふくらんだ蕾や新芽の誘惑にもう我慢がしきれなくなる。

人間という恐ろしい動物の眼を盗んで夜の白々と明けだすころ、こつそりと用心をしながら七ケ宿の稲子、干蒲、湯ノ原、峠田、横川、滑津、關の部落近くまで下りてくるのだつた。

羚羊は大てい二、三頭から四、五頭の群をなしていた。家長に率いられたそれぞれの群は澤に朝日が差込むころまで大急ぎで木の芽を喰い荒らし、それから峯に上り肩の吹きさらしに岩のように佇んで反芻し、また眠る。

「まんず羚羊の殖えたことハ、澤サ入えつてみッと羚羊の足跡ばりだや」

「ほんテ戰爭からこッちえらく殖えたなし、戰爭で山サ獵師がいがなかつたからだべ」

と村人たちは語りあつた。それも一つの原因には違いなかつた。が、もう一つ大きな原因があつた。ちようどいま藏王の刈田岳の裏手、杉ケ峯附近を宮城縣から山形縣へ通ずる森林道路の開通工事が進められていて、毎日爆破される發破の音に脅えた羚羊たちは峯つづきに七ケ宿の山岳地帶を目指して續々と避難して來ていたのである。こういつた狀況を獵師たちが見逃す筈はなかつた。地元の七ケ宿はもとより宮城、山形、遠くは福島、新潟、秋田などから本職の獵師やもぐりの鐵砲射ちが續々と入り込んできた。

「昨日は横川で四つとつたつうけ」
「一昨日は關でも二つ射つたつけ」
という話は大つぴらに交され、皮屋までが入り込んでその場で生皮の取引きが行われていた。
もともと七ケ宿村は德川の昔から羚羊の棲息地として知られていた。長い間の濫獲で羚羊が全國的に絶滅に瀕したことを憂えた政府は大正十四年の農林省令改正を機に天然記念物に指定し、狩獵法と文化財保存法の兩面から保護動物としてその捕獲を禁止したのではあつたが取締機關の手薄ということは法令を空文化した。密獵者の跡は斷たなかつた。
皮肉にも羚羊の絶滅を救つたのは大東亞戰爭だつた。獵銃が徵發され、事實上禁獵となつてはじめて彼らは繁殖を始めた。年に一仔、生長までに二年を要するという遲さではあつたが……。
ところで七ケ宿の山岳地帶には百に近い群が棲息していたが、フスベ山と蛤山とに挾まれた小深澤に飴色の見事な角を持つた巨大な牡に率いられた一群がいた。飴色角の妻である一頭の牝とその牝が一昨年產んだ二歲仔、それに若い二頭の牡——それが家族の全部であつた。牝は身籠つていた。もうあと二十日ぐらいで世の中に生れ出る胎兒は母の體內でしきりと蠢いていた。そのために牝羚羊の動作は他のものに比べて緩慢だつたが、鋭くなつた感覺と本能がそれを補つていた。彼女の夫である飴色角は羚羊仲間でもずば抜けて大きく、また年も取つていた。何歲ぐらいになつているかは村人も、獵師たちも、誰も見當がつかなかつたが、飴色角の齧痕を調べると下顎の前齒が半分缺

けていたので相當の年たけた牡だということは察せられた。雪の上に殘された飴色角の足跡は他のものの倍以上もあつた。その足跡から見て獵師たちは、

「二十三、四貫はあんべ」

と讃嘆した。それは、七、八貫から十四、五貫という羚羊の水準をはるかに抜いていた。しかしそんなことよりも獵師たちが彼を狙う最大の理由はその雄大な飴色の角にあつた。羚羊の角は漆黑だが、飴色がかつた角は滅多にない極上物とされ高値で賣買されていた。そこで七ケ宿に入り込んでくるほどの密獵者たちは、今年こそ俺が——と彼の跡を追つかけ廻すのだつたが、飴色角は決して密獵者たちが彈丸の屆く範圍内に近よることを許さなかつた。

耳と目と鼻とが鋭く、どんな岩角(いわかど)でも蹄の緣(へり)がかかりさえすれば跳ね飛ぶという、早くて强い脚を持つ羚羊の優れた性質の外に、飴色角には長い間、人間と闘つてきた豐富な經驗があつた。彼は二本足で歩いてくるこの動物が常に自分らの生命を脅す恐ろしいものであることを骨の髓まで知つていた。また飴色角は二本足の動物が持つ黑い棒の恐ろしさを知つていた。二本足の動物は足がのろいので黑い棒を持つていない時はさして危險ではなかつたが、あの尖端から赤黃色い光と大きな音を出す黑い棒はまことに警戒すべきものであつた。

飴色角は若い頃、この黑い棒の魔力に摑まれかけたことがあつた。まだその時は彼は人間の怖ろしさを十分知つていなかつた。その時二本足は大きな檜の根ッ子にじつと蹲つて彼が近づくのを待

つていた。

嗅ぎなれない動物の臭いに飴色角がふり返ると二本足が黑い棒を彼に向けるところだつた。本能的な恐怖に襲われて彼が大きく横に跳ね飛んだ時、激しい音と同時に彼は尻にひどい痛みを感じた。彈丸に强いという羚羊族の體質が彼の生命を漸く救つてくれたが、飴色角は永いことその傷に惱んだ。

その後もしばしば彼は仲間が二本足のこの黑い魔の棒のために打ち倒されるのを見た。魔の棒の尖から光と音が飛出すとその仲間はもう群に戻つて來なかつた。しかしやがて飴色角はこの黑い魔の棒がやたらに怖いものではないことを知つた。棒の魔力にはある限界があつた。ある程度の距離を保つておれば魔力は追つかけて來なかつたし、二本足の危險な動物もその棒を使おうとはしなかつた。黑い棒が横になつている時もそれほど恐ろしくなかつた。その棒の尖端が自分に向けられる時だけが危險であることも知つた。

飴色角はまた虎挾(とらばさ)みの恐ろしさも知つていた。彼はそのため左の後脚の四つに分れた蹄の一つを犧牲にしていた。捨(す)て銃(じゅう)の恐ろしさも知つていた。だから賢い飴色角に率いられたこのグループは比較的安全に日を過してきていたといえる。姙娠で警戒心が强くなつている牝羚羊は人聲のする里近くにはあまり行きたがらなかつたが、食慾の旺盛な若い牡や二歳仔はやたらに新芽を喰べたがつた。そこで止むなく飴色角は四、五歩あるいては大きな耳を廻轉させ、二、三歩行つては空氣の流

れを鼻孔に吸いこむという愼重さで家族を率きつれ里近くまで毎朝出かけていつた。

ある朝のことであつた。いつも通つてゆく溪流の傍の木立の佇いが、何となく違つているのを飴色角は敏感に感づいた。彼は立ち止つてじッと耳をすませ、臭いを嗅いだ。だが異常を感じたのは木立だけであつて他の動物——殊に恐ろしい二本足の動物が潜んでいる氣配はなかつた。そこで靜かに脚を進めた。昨夜降つた雪が一尺餘りも積つていたので四つ爪で蹠に剛毛の生えている彼らの脚も深く沈んだ。暫く行くとカワクルミとモアダの木の間に蕗の薹の束がぶら下げられてあつた。見るからに旨そうであつた。だが、飴色角はそこに嫌な臭いを嗅ぎつけた。冷たい金屬の臭いであつた。この臭いが漂うところにはいつも危險が潜んでいた。二本足が持つ黑い魔の棒がこの臭いだつた。雪や落葉の下からがつきと彼らの脚を摑まえる死の爪もこの嫌な臭いを持つていた。これは近寄つてはいけないものだ——飴色角はそう直感するとキューンという澄んだ警戒の叫びを擧げた。

飴色角の後には二頭の若牡が續いていた。彼らは腹が空いていたので、好物の蕗の薹に非常に未練を殘したが、命令に反いた場合の飴色角が加える鋭い角の懲罰を怖れてしぶしぶと族長の後に從つた。その次は二歲仔だつた。母親にいつもまつわりついているこの甘つたれ仔は、飴色角が嘗てそうであつたように人間の怖ろしさも知らず、まだ無邪氣だつた。群の周圍をぴよんぴよん跳ね廻つていた坊やは族長である飴色角の警戒を無視し蕗の薹に駈け寄ろうとして、慌てた母親の黑光りのする角で腹を突き上げられた。

群がいつも食事の場所と決めている澤の口に近づくと無數の二本足の動物たちの大きな足跡——それは環カンジキの跡だつた——が入り亂れてついていた。夜は明け切つておらず、陽の訪れの遲い澤の底のこの邊ではまだ青白い夜の光が漂つていたが、しかしこの足跡はたつたいまつけられたものだつた。危險は近くにある。ここでの食事は諦めなければならなかつた。

キューンという警戒の低い叫びを發して飴色角はくるりとやつて來た道に引き返した。

間もなく四、五名の横川部落の青年たちが澤を登つてきた。彼らは引き返していつた羚羊の足跡を發見して計畫が圖に當つたことを知つた。

「ほレ、この足跡見れや。後爪が一つ缺けてるス。これだば飴色角ン畜生のだ」

青年の一人が叫んだ。すると一番年長のスキー帽をかむつた青年がしッと怖い顏で戒めた。耳の早い羚羊は二キロぐらい遠方の人聲なら聽き取るし、風に乘つた體臭も嗅ぎわける。

もし彼らが飴色角の一族を脅かしさえしなければ經驗の淺い若羚羊は誘惑に負けて彼らが昨夜仕掛けて置いた罠に引つ掛るに違いないからだつた。青年たちはその場に屯ろして靜かに時の來るのを待つた。

飴色角は尾根を越えて隣の大深澤に移動しようと考えていた。群は再び蕗の薹が誘惑している場所に差し掛つた。みんなはすつかり飢えていた。こういつた困苦と飢餓に慣れている飴色角と牝羚羊は、その誘惑に眼も呉れないで通り過ぎたが、若牡のうちの一頭は空腹に眼が眩んでしまつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com